

第6回滋賀県立高等学校在り方検討委員会の結果概要について

1 会議の日時等

開催日時 令和3年6月18日(金)9時30分～11時40分(大津合庁7A会議室)

出席委員 原 清治 大野裕己 徳久恭子 炭谷将史 坂口明德 高田 毅
樋口康之 権並裕子 中作佳正 上原重治 中山郁英 北山智基

◇これからの県立高等学校の在り方について

2 委員からの主な意見

■将来を見据えた論点整理(案)

①	公私が建設的に議論する定期的な協議の場とは、現在年1回開かれている公立高等学校協議会とは別の場という認識でいいのか。また、「建設的な議論」の中には、公私比率の設定も視野に入れていくと私学側としては受け止めたらいいいのか。 → 公立高等学校協議会を活用することも含めて話をさせていただきたい。議論の内容は、募集定員も含めて、まずは幅広く意見交換をしていくところからスタートできればと考えている。
②	教員が高校のスクールミッションを達成するために、可能な働き方というものがある。中学校での休日の部活動は、段階的に地域部活動に移行していくことになっている。教員の働き方改革の観点で部活動改革が進められている中、高校の先生も手厚い指導ができるように保障しないといけない。
③	高校に進学した子どもたちが、主体的・意欲的に学べる高校が用意されている必要がある。すなわち、どの高校に進学してもキャリア実現ができないといけない。また、高島市のような人口減少地域では、地域振興につながる高校が必要。
④	滋賀県は、比較的交通の利便性がよく、居住地から広い範囲の高校に通いやすいとある。これは、県全体としては当てはまるかもしれないが、地域を細かく見ていくと通いやすい範囲に入らない人もいないのではないかと感じる。遠隔地から通う人は交通費がかかる。そこをどう考えるかも論点の1つではないか。
⑤	地理的不利地域に住んでいる生徒や経済的に困窮している家庭に対して、どういった支援を行っていくのかも踏まえた検討をしてもいいのではないか。
⑥	2つ目の〇で、「県立高校がどのような役割を果たしていくのか」の後に、「魅力化に向けてどのように協働を図っていくのか」等の文言が入っている方がいいのではないか。
⑦	魅力化を図っていくときには、コンソーシアムの実現が必要ではないか。
⑧	高校の魅力化は、高校内部だけでできるものではない。今後は、コンソーシアムの実現も中核に据えた検討も必要ではないか。
⑨	滋賀県立高等学校入学者選抜方法等改善協議会では、ぜひ塾や保護者等の意見も取り入れていただきたい。
⑩	前回の検討委員会で、多様化した入学者選抜に対応するため入試業務に携わる教員の負担が大きいという意見があった。子どもたちが主軸になるのは分かるが、学校の先生方が余裕をもって業務にあたることのできる体制は大事な視点であり、働き方改革の観点からも教職員への負担という問題点を少し書き入れた方がいいのではないか。

⑪	多様な子どもたちのニーズに対応するための専門スタッフや、学校と行政をつなぐ意味での事務職員の配置等、魅力化やイノベーションを生み出すために必要な条件整備について、今後の議論に入れるか考えた方がいいのではないか。
⑫	全県一区制度に関わり、虎姫高校の国際バカロレアは魅力的なので、湖北地域の地元の中학생へのアピールが必要ではないか。一方で、全県一区制度に関しては少し疑問もある。長浜市から学力上位層が彦根市内の高校へ流れたり、部活動の人数が減っている。部活動は学校活性化の1つの要素であるが、部活動が衰退してくことは悲しい現状だと感じる。
⑬	せっかく全県一区制度を導入したので、県南部から県北部へ行かないという状況を覆すような魅力ある高校を作っていけたらと思う。
⑭	これまで全県一区制度の中で県立高校の魅力化がなされてきたことを考えると、県北部への生徒の流れをつくる魅力づくりや部活動をどう活性化するかは、通学区域をいじらなくてもできる議論ではないか。この辺りは、もう少し丁寧に議論していきたい。

■高校の魅力化のアイデアや構想

①	学校長の意見は、これまでから取り組んできた特色ある学びを発展させるという意見と、時代の流れに対応した学びを設定するという意見の大きく2つに分けられる。
②	滋賀県として、各地域にどんな役割やミッションを課された高校を配置していくのか。また、それに対応した魅力化について、学校独自の工夫がどこまで認められるのか。
③	地域と密着した学びは、1学年4学級以下の小規模校で多いように感じる。学校規模によってアイデアを分ける必要があるのではないか。
④	中学校からは、高校の魅力は見えにくい。中学校と高校の交流が進むと、地元の高校に進学する生徒が増えるのではないか。
⑤	不登校や学校に通いにくい生徒が増えているので、丁寧な指導をしてくれる高校が増えると中学生の選択の幅が広がりありがたい。
⑥	生徒会活動や部活動だけでは、生徒同士の交流の範囲が狭い。学校間連携をすることで、他校の生徒から刺激を受けることも必要ではないか。
⑦	これまでの国際的な学びは、国際交流で留まっていたように感じる。単なる国際交流で終わらず、グローバル探究科のように外国語を使って学びを深めていくことができる高校ができるとありがたい。また、文理を融合させた視点からのカリキュラム編成はいいアイデア。
⑧	現状、保護者は子どもの成績や中学校の先生のアドバイス等でほぼ進路を決定している。中学校の先生は、高校の先生と交流することで高校の教育内容を知ることができ、中学生も保護者も進路選択がしやすくなるのではないか。
⑨	各校で特色あるコース等を作るのはいいが、併せて途中でコース変更をしても生徒に不利にならないような仕組みを考えていただきたい。そうすることで、保護者は安心して子どもの進路選択ができるのではないか。
⑩	各高校は、夏休みにオープンキャンパスという形で体験入学の機会を設けている。実際のところ、いい話ばかり聞くので入学後のギャップを感じる生徒はいる。現実の厳しさと、それを乗り越えた時の展望も併せて伝われば、中学生にとってモチベーションになるのではないか。
⑪	中高大一貫教育を行っている私立大学は、競争率が高く多くの学生を呼ぶことができている。これは、受験がないので受験勉強以外の学びを深めることができるから。将来を見越したら、地域を生かしていくという観点からも中高一貫教育校は残した方がいいのではないか。

⑫	普通科の「普通」は、「ノーマル」ではなく「ジェネラル」という意味で捉えている。それを踏まえると、トップアスリートコース等の名称に飛びついてしまってミスマッチが起きてしまう恐れがある。「ジェネラル」という意味での「普通科」の名称は残すべき。探究的な学びを総合的な探究の時間で対応することで、生徒の取捨選択が可能になるのではないか。
⑬	地域やアスリート等の探究的な学びを実践するには、教員の専門性も大切。浅い探究活動にならないようにするためには、高校と大学との連携は重要。
⑭	探究活動で出た答えや発表を中学校や地域に発信することで、中学校や地域に高校の取組を知ってもらうことにつながるのではないか。
⑮	県教委が、まず各県立高校の役割分担を明示した上で、高校配置や魅力化を進めていかなければ重複が起こる可能性がある。
⑯	地理的条件が不利な地域にある高校の活性化は、当該学校の教育だけに限った議論ではもたないだろうという話が出ている。地域人材の育成をどうするかは教育委員会に留まらない議論が必要で、他の関係機関との連携の検討が必要ではないか。
⑰	全国的に中高連携は不十分だが、滋賀県として中高連携を積極的に進めていくというメッセージを発信すれば、先進的な改革をしているというイメージにもつながるのではないか。
⑱	県教委は、各地域のどこにどのような高校を配置するかの見取り図を作っていく必要があるのではないか。各高校が同じような状況の中で競合することを避ける意味でも重要なポイント。
⑲	小規模校を統廃合するといった議論をするわけではなく、小規模校と大規模校の特色化に少し色分けをしながらかえていく必要があるのではないか。
⑳	学校現場の意見を視野に入れながら議論を進めていくことは、様々なものが素材として見えてくる。学校現場の意見を丁寧に拾いながら高校の在り方を検討していく会議の在り様は、継続していくべきではないか。

■職業系専門学科の在り方

①	高等専門学校の設置に関する議論はどうなっているのか。 → 昨年度から県の知事部局で議論が進んでおり、基本的に設置に向けた検討が始まっている。県教育委員会も検討会に参加している。今後、高等専門学校については有識者懇話会が始まると聞いており、引き続きしっかり関わっていきたいと考えている。
②	新しい産業社会を作っていくためには、数学が必要不可欠。また、近い将来、機械とコミュニケーションを図っていくためのプログラミング言語が必要になるのは間違いない。一般企業から専門の講師を呼んで、生徒と高校教員が共に成長していくような高校を作っていく必要がある。
③	職業系専門高校に入学する生徒は、ものづくりが好きな生徒ばかりではなく、偏差値で振り分けられていると感じる。学力が低い生徒や不登校等でしっかり学べなかった生徒等のための高校を、各地域に設置するべきではないか。その上で、ものづくりが好きな生徒を職業系専門高校に集めてもらいたい。
④	彦根工業高校が、彦根市や彦根商工会議所等とコンソーシアムを設立した。工業高校の在り方は、大学や企業等とのコラボを視野に入れて考えていく必要がある。
⑤	総合学科にはメカトロニクス科といった工業系の学びが設置されているが、選択生徒数は1クラス分くらい。学校間連携がないと、深い学びは難しいのではないか。
⑥	授業の一部はリモート授業を認めてもらえると生徒を集めやすいので、そういった施策も盛り込んでいただければありがたい。

⑦	中学生は3年生になって初めて進路のことを考えており、進路選択に向かう期間が短い。滋賀県の子どもたちは、普通科の認知度は高く公立志向が強いのが特徴。総合学科も同様だが、職業系専門学科はそれぞれがもっと個性ある学びを打ち出していけばいいのではないか。
⑧	特別非常勤講師の中には、通常の授業の学びだけではなく、生きる力の育成等、様々な学びを担っている先生がいる。これらの先生に、もっと活躍してもらうことが必要ではないか。
⑨	産業界が高校生に求めるものと、高校が考えている魅力とが合致していない部分があるのではないか。産業界と高校がお互い話し合い、共通の方向性を持つ必要があるのではないか。
⑩	高校の授業では、知識・技能・学力の向上が第一。その他、様々な教育活動を通じて人間性の育成を図っている。産業界から求められることに留まらず教育している。
⑪	中学生の段階で将来のビジョンがイメージできないことが、職業系専門学科が選ばれにくい理由の1つではないか。逆に言うと、職業系専門学科を選択する生徒の多くは学びたいことが明確になっており、近年そのような傾向が強くなっていると思われる。
⑫	彦根工業高校がマイスターハイスクールの指定を受けたが、県南部には瀬田工業高校や八幡工業高校がある。県南部では、学びの内容より地理的な要因でこの2校への志向が強いのではないか。
⑬	マイスターハイスクール等の期間付き事業は、継続していく考えがどの程度あるかが大事になってくる。事業期間が終わってもこの学校はこの路線で行くということが明示された後に、中学校にも情報が伝わる。職業系専門高校の在り方が変わってきているという発信も必要になると思われる。
⑭	保護者の中には、まだまだ大学進学を目指すなら普通科というイメージが残っている。高度人材育成を担いつつ、かつ、例えばSSH指定校等との連携した学びも実施している職業系専門高校を作って拠点化する等、新しい職業系専門高校の在り方に関しても示した方がいいのではないか。普通科と職業系専門学科の連携の中で、滋賀県ならではの新しい構想があると面白いのではないか。
⑮	企業の多くは高校生に基本的社会性を求めており、高校の指導もそれに寄っているところがある。企業が求める人材を育成するばかりでなく、技術指導等も含めしっかりとした人材を育成して売り込んでいく方が、魅力ある高校づくりになるのではないか。
⑯	滋賀県の産業教育が、社会的な責任を負う人材を育成する状況になっているのか問う必要があるのではないか。全てにおいて時代の最先端の学びがいいというわけではなく、専門人材をどう育成するのかを考えていく視点は重要。
⑰	従来の職業系専門学科の在り方を踏襲するばかりではなく、Society5.0に対応した人材育成につながる新しい案を打ち出していけるように、今後も産教審と連動しながら高校の魅力づくりの中に盛り込んでいく必要がある。
⑱	マイスターハイスクール等を中核にしながら、魅力ある高校づくりを進めていくことも提案するべきではないか。